

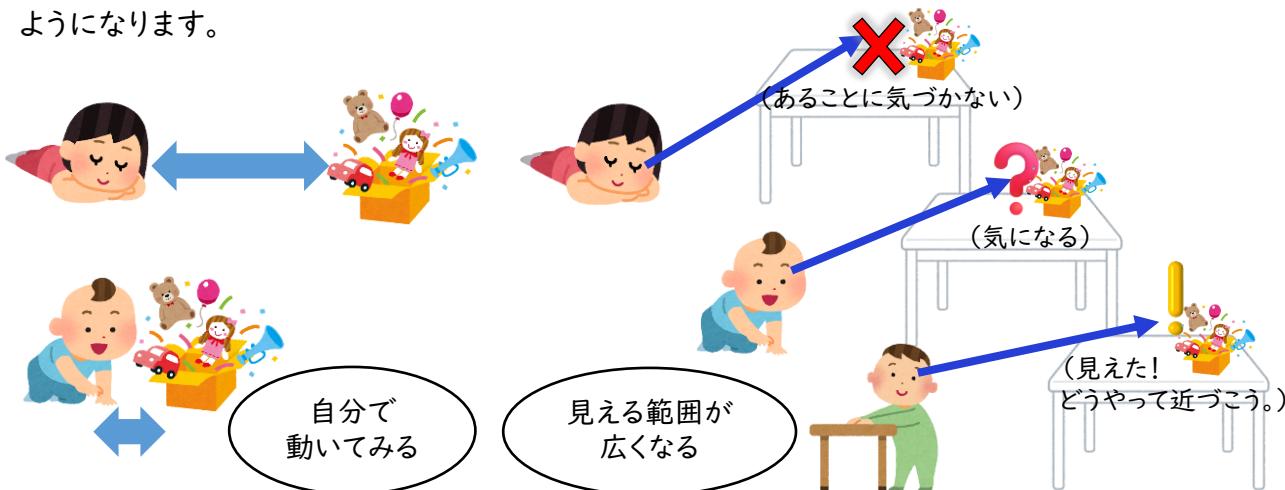
こんにちは。作業療法士(OT)の川島です。
「情報発信」のコーナーでは、OTの視点から見た、子どもの支援に役立つ情報を、随時紹介しています。
今回のテーマは、「子どもの発達とコミュニケーション」についてです。子どもの発達という観点から、子ども達のコミュニケーションとその支援について考えていきましょう。

1 発達するということ～発達の全体像を捉える～

子どもの発達とは、全員が同じように、目安通りに順番に進むような、単純なものではないということは、子どもに関わる職業の方や子育ての経験がある方は特に、経験として知っていることでしょう。「運動の年齢の目安」「言語の年齢の目安」のような、領域ごとに整理された年齢や順番の目安はよく語られていますが、目安はあくまでも目安であり、実際には個人差が大きいものです。

こうした目安をより効果的に活用するためには、「発達の全体像」を段階的に捉えることがポイントになります。特に、発達がゆっくりな子どもや、運動の発達はゆっくりだが言語は達者であるなど、領域によって発達段階がばらばらな子どもの支援を行う上では、重要な考え方となるでしょう。

「発達の全体像」を捉えるとは、ある行動ができるようになる背景に、他の領域の発達が関連している可能性を考慮することです。たとえば、運動の発達と認知の発達には関連があります。子どもの運動発達の流れとして、寝返り、ハイハイ、立ち上がり……といった順序がありますが、それらは目に見えたものや身体に触れたものの正体、あるいは音の出どころなどに疑問や興味を抱き、ものを動かしてみたり、自分で動いてみたりするようになることで、新しい運動を習得するのです。そうして、また見える範囲が広がり、別のものに興味を抱くようになります。



子どもの発達は、感覚と運動、認知、社会性、その他の機能が様々な場面で相互に作用し合って進んでいくものです。その時期や順番がおおよその指標として示されているのが、各領域の年齢の目安というわけです。これには、ある程度の個人差があるので、重要なのは数字を見ることだけではなく、「まだできていないこと」だけではなく、「できていること」、そして「次にできるようになることを期待されること」を考える指針としての活用です。

このように、発達の全体像を意識することが、子どもの指導・支援を考える上での手助けになるかもしれません。

2 子どもの発達とコミュニケーション～コミュニケーションを支える要素～

子どもの発達は様々な領域の関連によって生じますが、コミュニケーションについても、特にその観点が重要になります。一般的な子どもの発達の流れを踏まえながら、様々な要素がどのように関連しているのかを見ていきましょう。

(1) コミュニケーションの基礎

「コミュニケーション」の例として思い浮かぶのは言葉を使ったやり取りですが、その基礎には、「自分が発信したことに誰かが反応してくれる」という経験が関わってきます。

新生児は、感覚的に物事を感じ取ります。そして、それが自分にとって快い感覚であるか、不快な感覚であるかによって、笑う・泣くという反応が生まれます。養育者はその様子を見て、子どもの感じていることを想像して、対応することになるでしょう。子どもは何か目的を持って発信しているわけではありませんが、養育者が読み取って対応してくれることによって、やり取りが生まれるのです。これがコミュニケーションの出発点になります。そうしたやり取りを重ねるうちに、感情を伝える手段として、意図して泣いたり笑ったり、やがて声を出したりすることができるようになり、意図を言葉で伝えるための基礎を形成していくのです。

(2) 認知機能と視覚の発達

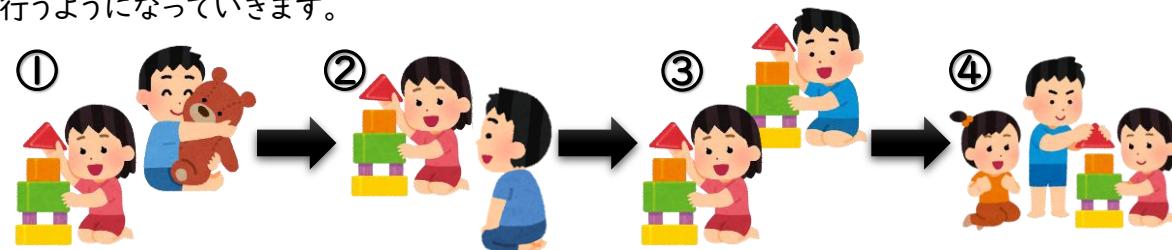
子どもの発達を考える上で重要な感覚のひとつが、「視覚」です。実は新生児は視力が低く、視力0.8～1.0程度まではっきり見えるようになるのは3～4歳頃とされています。

新生児には、自分の周りのことを知る手段は多くありませんが、ある程度視覚が発達してくると、視覚的に物事を識別したり、周辺環境を把握したりすることが可能になります。その例の一つが人見知りです。もちろん、人見知りがあまり強くないという子どもはいますが、極端に早くから人見知りをしているという子どもが少ないのは、視覚の発達によって人の顔を区別することができるということも、その原因となる要素の一つであるからです。

このように、感覚面における機能的な発達は、認知機能や社会性、情緒の発達にも大きく影響してきます。

(3) 遊びと社会性の発達

人とのコミュニケーションを考える上では、社会性の変化も重要な要素となり、たとえば、遊び方の変化から考えることができます。Parten(1932)*による分類では、同じおもちゃを見たり、触ったり、動かしたりするという、物と感覚を中心にした①ひとり遊びから、他の子どもの遊びに着目する②傍観者遊び、同じ場所で同じ遊びをする③並行遊びを経て、おもちゃの貸し借りをする④連合遊びへと、遊びの形が変化していくとされています。最終的に、3歳頃の子どもは、ごっこ遊びなどで同じイメージを共有して一緒に遊ぶ協同遊びを行うようになっていきます。



特に、おもちゃの貸し借りや遊びのイメージの共有という段階では、その過程で子ども同士のコミュニケーションが生じます。お互いが自分の持っているイメージを譲らずに、喧嘩になってしまうことも多いですが、このように同年代との間で生じる言語的・非言語的なやり取りを通して、子どもはどのようにしたらトラブルなく一緒に遊べるかを学び、社会性を身に付けていきます。

*Parten, M. (1932) Social participation among preschool children. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 27, 243-269.

3 言葉の獲得と子どもの経験～語彙は経験によって広がる～

コミュニケーションについては、経験も必要になってきます。たとえば、「自分が発信したことに誰かが反応してくれる」という経験や、誰かとの関わり合いによって社会的な広がりを経験すること等が、重要です。こうした様々な経験は、**コミュニケーション手段**の広がりに関わっています。特に、言葉を用いたコミュニケーションでは、**語彙の習得**において重要な意味を持つのが「経験」です。

人は、新しい語彙を習得するとき、その単語や表現と、それを聞いたときに感じたものや状況を結びつけます。その時に目の前にあったものや、同じタイミングで現れたものなどの要素から、意味を推測するのです。さらに、話している人がどこを見ているのか、どのような話の流れで出てきた言葉で、どんな言葉と一緒に使われていたのかといった、視線や文脈、表情や話し方などの社会的な要素も判断材料になります。

しかし、一度だけでは、言葉の意味を勘違いしてしまうこともあります。例えば下に示した例では、女性が犬を見ながら言った「犬」という言葉で、男の子は「四足歩行の動物」全般を指す言葉ではないかと判断しています。しかし、同じ四足歩行の「猫」に出会ったことで、「犬」と「猫」の違いを考えることになります。下の例では次の段階で「猫」を判断できるようになっていますが、実際には、色々な動物を見る度に「犬」なのか「猫」なのかという確認を行い、徐々に正確な分類ができるようになっていくことでしょう。犬が「犬」であるという経験と、四足歩行だが「犬ではない」動物を知る経験によって、正しく「犬」という言葉を使えるようになるのです。このように、言葉の学習の基礎は、繰り返し経験することと、多様な経験をすることにあります。



経験とは、対象のものに直接接触しただけではありません。たとえば、「重い」「速い」など他のものと比べることによってわかる様子を表すものや、「美しい」などの概念を表す言葉は、触ったり、持ったり、体感したりといった様々な感覚や、何が「美しい」とされるのかといった他人の感性に触れる経験を繰り返して学んでいくものです。

これらのことを踏まえると、「同じような状況で同じような経験を積むこと」と、「異なる多様な経験を積むこと」によって、パターンを学びつつ、既存の経験との比較を行うことが重要と言えます。家庭など同じ人物との関係の中で積み重ねる「同じような経験」と、園や学校などで様々な他者と触れ合うことによる「異なる多様な経験」とを、子ども自身の中で擦り合わせながら、コミュニケーションは発達していくのです。子どもに学んでほしい内容に合わせて、同じ内容の経験を反復することに加え、これまでと状況を少しだけ変えた経験ができるような活動設定によって、「条件が変わると何かが変わった」「何が違うのだろう」と自らで考える力を引き出す支援が大切です。

備考：共同注意

経験の重要性は、言語的コミュニケーションに限ったものではありません。養育者と子どものコミュニケーションの発達という視点では、言語の獲得以前から「**共同注意**」が出現することが知られています。何をしたら相手が反応してくれるのか、どう感じるのか等、他者の気持ちや考えを推測するためにも非常に重要な非言語コミュニケーションです。



4 コミュニケーションが苦手な子どもと経験～経験を支援する視点を持つ～

ここまで、コミュニケーションの発達という観点から、「発達」を単体ではなく、子どもの全体像として捉えることの重要性和、その際に重要になる「子どもの経験」という視点について整理してきました。

日々子どもたちと触れ合っていると、様々な子どもに出会います。あまり話すのが得意ではない子ども、静かにした方が良い場面でも話しすぎてしまう子ども、本当は一緒に遊びたいのに友達作りが苦手な子ども、何かとトラブルの中心に居ることが多い子どもも、いるかもしれません。「この子はこういう性格だから」「そういう特性なのだろう」と考えることもあるかもしれません。

何らかの性格的、発達特性的、あるいはその他個人の資質に起因する理由によって、コミュニケーションを苦手とする方は数多くいます。これらの要因を根本から変えることは、簡単ではありません。しかし、経験は違います。様々な他者と触れ合うことで「多様な異なる経験」を積み重ねることそれ自体が、大人が子どもに対して提供できる支援の一つになる場合もあります。

人の人生は人それぞれです。同じ年齢の子どもだからと言って、全く同じ経験をしてきたということはないでしょう。さらに、積み重ねた経験をどのように解釈するかや、どの程度経験すれば定着するかについては、個人差があります。それゆえに、「前も教えたのに、身につけていない」と思うことがあるかもしれません。しかしそれは、経験の種類を正しく分類できるまでは理解しておらず、まだ少しずつ同じ経験を蓄積して学習していく段階の途中なのかもしれません。あるいは、経験の質が以前と全く同じではないので、本人の中では「異なる経験」だった、と認識している可能性もあります。

コミュニケーション能力というのは、ある日突然身につくものではありません。経験の積み重ねによって少しずつ本人の中での擦り合わせが行われていくものですから、子どもに経験してほしいことが経験できるように、関わり方の工夫について考えることや、積み重ねる経験の分類や理解を本人と話し合っサポートしてあげること等が、コミュニケーションを支援するヒントになるのではないのでしょうか。

子どもを教えるだけでなく、経験を支援する。そうした視点を持つことも、子どもの発達を捉える一つの在り方かもしれませんね。



「SSC OTからの情報発信！」閲覧者の皆様へ

令和7年度の「SSC OTからの情報発信！」は、今回が最終号となります。

作業療法士の視点から、子どもの様々な様子を紐解いてきた本連載ですが、子どもの発達支援は、これが「正解」だと言えるものがあるわけではない、臨機応変な対応が求められるものです。本連載はあくまでも、考え方を提供する立場にすぎません。本連載および、番外編である動画「SSC_OTube!」を通して、様々な理論や考え方に触れることが、少しでも、日々子ども達との関わり方・考え方のヒントとなってくだされば幸いです。

本連載をご覧いただき、誠にありがとうございました。またどこかでお会いしましょう。

令和7年度3月 SSC作業療法士 川島